CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

長野県立大学リポジトリ
THE UNIVERSITY OF NAGANO REPOSITORY
信州共同リポジトリ
REPOSITORY OF SHINSHU

松代藩第六代藩主真田幸弘点取俳諧『きく畠』の紹介と翻刻(1)

著者	平林 香織，小幡 伍，玉城 司
雑誌名	長野県短期大学紀要
巻	65
ページ	135-147
発行年	2010-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1118/00000147/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

長野県短期大学紀要　第65号　2010年12月
Journal of Nagano Prefectural College, No. 65, December 2010
長野県短期大学
〒380-8525 長野市三輪8-49-7

松代藩第六代藩主真田幸弘点取俳諧『きく畠』の紹介と翻刻（1）
On "Kikubatake" by Yukihiro Sanada, 6th Load of Matsushiro Domain (1)

平林香織　Kaori Hirabayashi，小幡　伍　Atsumu Obata，玉城司　Tsukasa Tamaki

はじめに

松代藩十万石第六代藩主真田幸弘（元文五年〈一七四〇〉～文化一二年〈一八一五〉七六歳。俳号菊貫・白日庵他。以下俳号により菊貫と記す）は、漢籍、和歌、俳諧、紀行、書画に分類される膨大な文芸資料を残している。中でも、『菊の分根』または『菊畠』と名付けられた一七〇点を超える点取俳諧資料は、九百巻九万句に及ぶ。明和九年（安永元年）（一七七二）の『菊の分根』一冊一六巻から、文化一一年（一八一四）中の『菊はたけ』四冊二一巻までのものが現存し、平均すれば、年に二〇回以上の点取俳諧を興行していたことになる。点者には江戸座の俳諧宗匠のほか、文化年間には雪中庵完来など雪中庵系俳人も加わり、点者が百韻につき百名にのぼる巻もある。なお、菊貫は、明和・安永期ころ、高太初や大島蓼太にも師事しており、蓼太が裏書をした文台が、松代文化施設管理事務所（真田宝物館）に伝来する。[1]

その治世は、宝暦二年（一七五二、一三歳）から、寛政十年（一七九八、五九歳）までの四六年間に及ぶ。藩主の座についてすぐに恩田木工民親を勝手方家老に登用、恩田木工は、役人の不正を正し、倹約に努め、藩政を刷新した（宝暦改革）と言われている。菊貫は、儒学者菊池南陽を松代に招聘し、藩士の教育活動に力を入れた。また、和歌を賀茂真淵に学び、真淵の弟子大村光枝を京都から松代に招いている。真田昌幸・信幸・幸村以来「武の真田」として名を馳せた真田家であるが、菊貫の事績は「文の真田」としても面目躍如たるものである。

菊貫の文芸資料については、早く福井久蔵によって、「一巻に収むるもののみにてもその数すくなからず、その全部に於ては甚大の数に上る」こと、また、「当時名たゝる俳師」「諸侯」が一座していることが紹介されている（『諸大名の学問と文芸』昭和一二年五月、厚生閣）。本格的な紹介としては、俳諧紀行を翻刻した玉城司・伊藤善隆の「翻刻　菊貫著『旅つゞら』」（『研究と評論』56号　平成一一年六月）、「翻刻　青葉陰」『研究と評論』59号　平成一二年一一月）がある。その後井上敏幸・西田耕三らが、平成一七年から科学研究〈基盤研究B〉「近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に関する研究」（課題研究番号17320040　研究代表者井上敏幸）を実施し、菊貫の年賀集を雑誌『松代』17号（平成一五年三月）～21号（平成一九年三月）に五年間継続して掲載した。[2] なお、井上らの科学研究の成果は『近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に関する研究　論文編・資料編　第一部』（平成二十年三月）にまとめられている。

以上のような研究成果に基づき、筆者らは点取俳諧資料を調査・研究の対象として、同時代の真田家文書『御側御納戸日記』等との連関を視野に入れつつ、新たに科学研究〈基盤研究C〉「真田文書アーカイブの構築及び松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧に関する研究」（課題研究番号22520252　研究代表者玉城司）を開始した。

本稿は、その端緒として、松代文化施設管理事務所（真田宝物館）収蔵の『菊畠』を翻刻するものである。目録番号4／1／1の『菊畠』（四冊）享和元年（一八〇〇）～三年（一八〇二）に巻かれた二七巻二七〇〇句である。紙数の関係でここに第一冊九〇〇韻のうち第五までを翻刻する。

（注1）文台の裏書は次の通り。

松代の君昇進させ給ふ折から飛田の国の人より贈たる一位のときにめでたければ発句得て祝し奉けるを頓て御もの数寄の文台に造らせ給ひてうら書きせよとあふせ事のありければ

おもしろきはつ日やこゝを位山　蓼太

（注2）菊貫の俳諧一枚摺に関するものに、雲英末雄「俳諧一枚摺について」「真田菊貫の俳諧一枚摺」（『書誌学大系84俳書の世界』平成一一年、青裳堂）、雲英末雄監修『俳諧一枚摺の世界』（平成一一年、早稲田大学文学部）、玉城司「真田幸弘の俳諧一枚摺」（『江戸文学』25号、平成一四年六月）がある。井上敏幸『翻刻　ちかのうら』（『松代』16号、平成一五年三月）は菊貫の追悼句集の紹介・翻刻を行ったもの。

翻刻『きく畠』

【書誌】（『近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に関する研究　資料編第二部』〈平成二十年三月〉による。）

真田宝物館整理番号・題名　4‐1‐1‐1・きく畠

書型・装幀・料紙　大本　縦二六・九糎、横一八・六糎　袋綴　楮紙

表紙・題簽　砥粉色無地　原書題簽、左肩無辺打雲「享和元酉同二戌きく畠　他連　乾」

料紙・丁数・行数　本文共紙　全91丁墨付91丁　7～8行

【凡例】1　旧漢字・異体字は大旨原本の通りとした。
2　朱書はゴシック体で記した。
3　判読不能箇所は□で表した。

4‐1‐1
享和
酉戌亥
きくはたけ　他連　四巻」秩題被
享和酉戌亥
菊畠　四巻」付箋
4‐1‐1‐1
享和元酉同二戌　他連
きく畠　乾」表紙
百員　子鷹　陸馬　冬映　得器　双鳧
佛外　石鯨　吾山　崑山　為大
百員　蜄水子　凉山子　素外　李岱　陸馬
甘棠子　甲長子　得器　兌坐　為大
百員　蜄水子　凉山子　得器　得友　立志
素丸子　霞外子　左簾　古梁　器観
鶯嬌子　巵言子　紫鳳　冬映　退住
百員　錦車子　仙哦子　子鷹　樗雲　隻鳧
甲長子　亀文子　富屋　莪坐　秀仙
珠成子　甘棠子　百珉　沾山　兌坐
石鯨　為大　陸馬　佛外　吾山」1オ

百員　環川子　冬英　陸馬
百員　如柳　花磎　徒柔　儿友　一漁
崑山　陸馬　石鯨　得器　立志
百員　雀山子　冬央子　亀文子　陸馬　為大
升来子　雀媛子　宝井　冬映　石鯨
百員　子鷹　李岱　百珉　隻鳧　未明
東寓　春色　兌坐　崑山　紀逸
為大　陸馬　佛外　富屋　百化」1ウ
陸馬　冬映
壬正月廿五日　青山持子鷹
得器　双鳧

俳諧連哥百行

催主　青山

石鯨　崑山
南部坂持　佛外
吾山　為大」2オ
子鷹兌坐陸馬隻鳧得器石鯨佛外崑山吾山為大」
付箋
家ちかく鳴立つ
雉や朝のほと
（点判読不能）」2ウ
堰の草に余る雪解
二一一一一三一三一一
長閑なる空に遠路誘れて
一一一一一一一一一一一

先かひやりぬ写書もの
一一一一一一一一一一
見晴の高き所の風の尚
一一一一一一一一一一
久しき沙汰の新地開発
一一一一一一一一一一
暮の月囲爐裏に渋茶こと〳〵と
一一一一一一一一一一
飛て竈馬の髭の長さよ」3オ
ウ
七五一七七七十三七五七
油絵の形もありし葉鶏頭　子絃
一一五七二一五五一一
月代も剃る醫師の惟光　有斐
九五五五五二五七一
衣〳〵のわけてつれなき旭影　如圭子
一一一一一一一一五
浮名包めと舩も出て行　芦風
一一一一十五一一七二三
蜀魂聞た咄の耳と口　菊貫
一五七一五一一一一一
座頭の取てまはす別荘　梅足
一七七三二五五一五五廿
素機嫌の内に見置床飾　馬隠」3ウ

一一一一一（点判読不能）
笹湯仕廻ふてかそへ日をしる　雲牙
七七十一一一一一一一七
夜をこめて尼も手傳ふしきせもの　牛如
一五三七七十五一七七一
舟のつかぬは吉原の疵　午睡
十一一一三一二一一一一
敷藁もうかと踏れぬ深ぬかり　完路
一一一一一一一一一一一
昼も朧に月の傾く　フ
一一一一一一一一一一一
枝ことに結ひ捨たる花切手　フ
五一一一一一一五一一一一
一荷の蜆ミな買て遣る
二ヲ　フ」4オ
五十五七五七七七十五十
三夫婦の末の夫婦か雛立て　三楽
七一三三二五五一十一
汐風巻て浦賀より文　如圭
一七一一二七七一一五
青〳〵と冨士の生れし皐月晴　有斐
一五五十五五五十五五七
二十　二十
菌取馬におつ開く門　子絃
一一一七一十一三一七
酔醒に甘露ハしらす水の味　三楽
一五七三十五一五十五三
其角か癖を唄ふ新造　完路
一五一一一七一一一十八
占にかくした年に氣も付す　牛如」4ウ
一一七二七十五十十五十□
桜と寺の遠い本町　牛睡

十五五五三七五一五五
是非ともと碁盤出せる春の雨　芦風
一一一一一一一一一一一
月もあり〳〵霞籠る夜　フ
一五廿一五一五七十五一
産声にほつと息する一家中　菊貫
一一一一一一一一一一一
屋舗育のまつも張リ臂　馬隠
五五七一一七二一一十五
鉾に雪箒も建た後の肴　梅足
一一一一一一一一一一一
尋ぬる人か是て幾人　フ」5オ
二ウ
十十十一五七一五一七
世の中へ撞ねと響く三井の鐘　雲牙
一一一一一一一一一一一
勘当調度當る厄年　御
一七五一七一一五五十五
桶伏を揚る力はそとに有　馬隠
一五五三十三五七十三一
目と目て噺す様な相惚　梅足
一十七一二十八十三一五
のかれねと知ても逃る煤の胴　雲牙
七五一一七一五一十一
根付時計の日か暮て居る　牛如
五一七十一一七一七十
鎌倉へ松魚命と膝栗毛　午睡」5ウ
一一一一五□七七□□
河太郎とらへた川に人百　芦風
一一一一一一二一一一一
風呂敷に包し物を其儘に　フ
一十八十十廿十十八一一三

内々御意も有りし禁盃　有斐
十一十五十五一五三五七一
中入は程よく暮て烏帽折　如圭
一一一一二二一一一一一
さいかち虫の髪て書も讀　子絃
一一一一一一一一一一一
花は今盛りと思ふ宵の月　フ
一一一一一一一一一一一
名もなき橋に立し陽炎　フ」6オ
三ヲ
一一七一一五一七五一
実も春行幸の車三度まて　有斐
七十三一一三一一五一五
小僧は院の外を極楽　三楽
一一一七十一一一五三
戈牛か素顔目にたつ朝参り　完路
廿一五一一一五五一一
細身なからも雷除の太刀　如圭
一一一十七一七一一一
鮎唄の遠く聞へてむせ暑し　子絃
十五一一二五五五七七
馬に曳れて帰る生酔　三楽
一一一七五一一一五一
文拾ふ鉄醤堀の薄氷　完路」6ウ
一一一一一一一□□
操り女房のかけも能取る　牛如
一五一一一一一一一七
しんだいを持佛にふるう門徒宗　午睡
一一一一三三七五一一
斎もせぬ朔日の灸　芦風
七一一五一一一一一一
蘭鉢に夜は借らるゝ額見石　梅足

壱一一一一一一一一一
　玉の兔も指覗く窓
十七七十三七一七十五
松坂の踊に娵の突出され　御
五一一一一五一一二一
　袖を留たて逡ふ風俗」7オ
三ウ
一一一一五一七一一一
呉服やの荷物に傘を頼ミけり　馬隠
一五一七一七[五廿]七五七
　幟のうちは狭い新道
一一五一七一七一七十
人過た棺の哀れめかぬなり　梅足
一一一一一一五五一七
　何所か淋しく見ゆる十徳　馬隠
一十一一二一五五一七
祝義後に又恥かしき帯祝ひ　雲牙
七三七[十八]五十三一五五一
　下女か寝覚は葛城の神　御
一一一一一一一一一一
朝の月影あり〳〵と豊さよ　フ」7ウ
一一一一一一十五三七
　千石舩に露をもつ稲　子絃
五十五一十五一十五一五一
さすか又他國の秋の身にしみて　三楽
一一七七十五五七七七七
　雇ひ禿に狐の相　完路
一一一一一一一一一一
豔に見へてやつる恋病　有斐
一一一一一一一一一一
　饗多き花の此ころ　フ
七一十七一五一一一一三
長き日を五段の舞の手に暮て　如圭
一一一一一一一一一一
　汚れぬ掾にうこく陽炎　フ」8オ
ナヲ
一五五一二一五十五三十
這かゝる貫ひ笑に立とまる　三楽
五五一一七一一一一一
　先も承知の鼠鳴をする　フ
一五一一一十十五七十五
思ふ恋琴と尺八との隣同士　子絃
十五一十五一三一一一一五
　引出物にて見たる國行　如圭
一七一一五三一七五七
覆とる空はたま〳〵冬牡丹　有斐
一七七七一一十一七三
　碁による顔の連哥にも寄　牛如
一一七一十八一一七十八一
牛嶋のむこふ今戸は浅間山　午睡」8ウ
一五一一一七十三□□七
　壱分ひらりと鯉の俎板　芦風
一七五一七一一一二七
不拍子に拍子きかする牽頭持　梅足
五一一一一一五一[五廿]五
　白眼は白眼かへすうき中　フ
七一一七一一七一一一
うつくしく源平香の敵身方　馬隠
一一一一十三一五一七
　あれても角かあるか鹿の音　雲牙
一一一一一一一一一一
雨風の能調て月の秋　フ
一一一一一一一一七一
　山の屋鋪は艸の花原　フ」9オ
ナウ
十[廿]七一一一一七一五
竹馬にお乳やめのとの声懸て　御
一一一一七一五一一一
　とらへた鴟鴞(ヌエ)の舌切て見る　牛如
一一五三五七一七三七
空海は壁へ教化のなくり書　午睡
一一一一一五一一一一
　捨た眼鏡も老のかんでう　芦風
一一一二一一七一五七
鰒揚る舩も新場の雪明り　完路
七一一一一五一一一
　貫ふた猫を遣る先かなし　フ
一一一一一一一二一
公に花をゆるして見せる郷　フ」9ウ
（点判読不能）
　霞の奥に立續く家　フ
　青山持
子鷹　六十八点如圭子三十、公二十九、三樂三十七、公三十七、雲牙」10オ
兇堂　五十四点三楽
陸馬　五十三点如圭子四十三、公三十、午睡三十二、公
雙鳧　三十六点子絃三十二、如圭子
得器　四十四、完路三十九、午睡三十四、梅多里」10ウ
　難歩持
石鯨　四十三点子絃四十、午睡三十七、雲牙三十八、雲牙
佛外　五十一点子絃

三十四、蘆風」11オ
崑山 四十一点子絃 三十九、三樂 三十八、午睡
吾山 四十三点午睡 三十八、完路 三十四、公
為大 四十五点馬隠 四十、三樂 三十八、雲牙」11ウ
亥閏正月
蜄水子 素外 升来子持 得器 涼山子 李岱

百行稿

十吟八句言 月花折二点増

兌堂 甘棠子 此方持 陸馬 甲長子 為大
二月四日満尾 催主白日菴」12オ
（白紙）」12ウ
旅の氣になりすましたる霞かな
今をさかりに咲る菜の花
春の雨煙艸のしめり加減まて
調法からるゝ小細工の好き
此度は打て替たる住居かえ
犬の覚のよきに感する
二人寄みたり集る月の友
秋かせふくむふみの讀さし」13オ
甘棠子 甲長子 兌堂 陸馬 為大 升来
子蜄水子 持涼山子 素外 得器 古梁李岱」付箋
ウ
七一三五一一一一二五
呉竹に斟酌らしきわたり鳥 素文

一三五七一五三十五五七 素飛
笑ひにたこの入りし新造
一一五十七七五十七十
恥しき坐頭に年をあてられて 升来
一五三一十八一七一十五七
雪をさかなに酒酒をのむ 菊貫
五一一一一一一一一一
真先へ才蔵市の大べざい 雲牙
一一五一一一一一一一
財布ほといて届状出す 牛如
一一五七十一三一二七
遊ひ入る子に居風炉を水にして 梅足」13ウ
一一一一七一三一三七
夢話行しやう釣された亀 馬隠
一一十五一一五五七五
霊宝に変して讀ぬ万狐の手 太路
㊀㊁㊂㊂㊂㊂㊂㊂㊂
起〳〵の目に月の涼しき 霍媛
五一七一五三七七五五
もの思ひしこきたらりと立姿 仝
一三七三五一三一一三
能もあしくも仲人の瓣 素文
㊀㊁㊂㊂㊂㊂㊂㊂㊂
天晴と花の主しの誉て行 仝
㊀㊄㊂㊂㊂㊄㊄㊂㊂㊂
永き日を知る外繋の馬 升来」14オ
二
七十三一十十八七五五七
油ても流れそうなる春の川 升来
一一五一三一十一一一
女の上戸こひの安賣 素飛
一一一一七十三七五三五

よい器量誉れは白眼かへされて鶴媛
一三十三十五一七三一五一
衆道も武備も流行御家中 菊貫
一一五一一一五七五一
虚無僧の姿には似ぬなまり言 梅足
一五一一三一五一十七
于鄒かさる石町の鐘 雲牙
十五十一七十七五五七十
さはつたら手のきれそふな初松魚 太路」14ウ
一一一一一一一一一一
元気の汗を拭ふ福から 馬隠
一三七七三一三一二一
木寄した日に木曾山の咄して 牛如
一七五五七三七一五一
櫻のうちはなまくさい寺 梅足
一五五一七一一十三
朝夕は春の扇をわすれかち 雲牙
一五一一五一五三七七
蠶にこまる巡見の宿 牛如
一一一一一一一一一一
朧月雨にやならんあたゝかさ フ
一一一一一三一一一
活る火入の火加減か傳 フ」15オ
二ウ
一七七十五一十五七五五
楽寝にも母は身延を後にセす 菊貫
一十五一一一一五七一一
勘当の場て機を裁切る 太路
一一五五七一七一一一
油壺さけてふら〳〵戻り牛 馬隠

十一一一七一三一一一三　佛法に入る大津絵の鬼　素飛
一一一一七一三一一一　姿見にへらむ悋気を解かゝり　素文
一一七七十三七十七五　酔せた跡か怖い御妾　升来
一一五三一一七三三一　釣る幟に丈の低いを嬲られて
一一一一一一一一五一　涼敷風の真直くに来る　素飛
五三一一一一一一二七　漕きやうの用なさそうな遊山舟　升来
一五十一七七七一二一　揃ふ樂器の氣もあふた友　菊貫
三五一一五一五一一一　黄金の光たふとき西東　雲牙
一一五一一一一一一一　のとかに睡気さそふ講中　フ
一一一一一一一一一一　あらそひの皆われかちな月と花　フ
一一五一一一一一一一　休さへ知れぬ春雨の日に　フ」16オ

三

一一七七七五五五七五　手枕に肘の汚れを笑れて　升来
一一五七三三一十八七　醉はさつはり居續の夢　素文
一一一一一一一一一一　生霊出来不出来ある雪催ひ　素飛
一一一一一一一一一一　かまひの見ゆる衛士かたぶく　雲牙
一一一一一一三五一五五　長普請釘の符帳も聞おほえ　牛如
十五十五五一五十五二一　牡丹に廿日酒許す寺　太路
五一一一一一三一一一　智恵競とふと若衆を振向せ　菊貫」16ウ
一一七一十五十五七三一一　結句噺のかたい相ほれ　梅足
一七五七一一一十五一一　謡まて小聲にうたふ内祝ひ　馬隠
一一一一五一五一七一　隠し藝しやと見ぬふりてミる　素文
五三五五七一十五十五一一　慎重の温泉場帰らぬか又病ひ　鶴媛
㊀㊆㊀㊂㊀㊆㊀㊂㊀㊂　月かけてする菊に丹残　素飛
一五一三七十七一五五九　関取のかしこまるのも只てなし　升来
一一一一一一一一一一　いまた薄着の肌寒きころ　フ」17オ

三ウ

一十五十八一七七五七五七　猪牙よりも心の駒の足はやき　菊貫
一七十五七一一七一一一　女あるしの様な別荘　梅足
一一七一一一五一十五十五　掃出して四ッから過か衣かえ　雲牙
一一一一一一一一一一　盃らしく無い峯の松　太路
一一十五一一一一一一三一　内々て神馬に絆綱当て行　馬隠
一五五一五一五一一一　名代の乞食縁日に来る　牛如
一一一一七一一一一一　橋臺に渡銭の笊か向ふ前　梅足」17ウ
一三一一一一一一一五　後の袷は風呂敷のまゝ　馬隠
㊀㊂㊄㊂㊄七九㊂㊃㊂　月の興手前踊に嫁も出て　牛如
五一一五一一一一一一　髪もそれから薮入の風　雲牙
一一十五一七一十一十一　しつくりと咄の合し御經宗　菊貫
一一一七一一一一一一　春もせわしく帰る後から　馬隠
㊆㊄㊂㊂㊂㊂㊂㊃㊃　脇指に羽織あつけて花の山　太路
㊀㊂㊀㊂㊀㊂㊀㊂㊀㊂　八巾上る日に蝶のふは〳〵　素飛」18オ

名

一一十十十七七一七十八　からかへはきかぬ氣になる男の子　霍媛
一七一一三三三一一一　また手のほしい入梅の張物　素文
一十七一七一七三一七　小村てもひと肌ぬきし祭前　素飛
一一一一一一七三五一　唐音らしき生酔の弁　升来

十八

五一五七三三十七二一　胴揚に惚人の胴は抱かねて　鶴媛
一一一一七十五一一一　長く〳〵と振袖の欲　仝
一一一一一一一一一五

あつさりと見えし祇園の柱立　素飛」18ウ
一一一一一一三七
竹田細工も跡は人形　素文
五十五十五七三五一七七
郭公産屋の伽の聞出して　太路
一五一三三一三一一一
雨にひそ〱連哥初まる　雲牙
一五一一一七一五一
立居まて室町風の流石文　梅足
一三一三一一一一
按摩の不審はれぬ加梨勒　太路
一一一一一一一一
飛石にはらりと月の露ふりて
一一一五一五一一一
國の便に添て初茸」19オ
名ウ
一三五一十五五三五一十三
相撲取秋のあはれはしらぬ也　馬隠
一五五一五一七三五五
男優りの妻の鉋丁　菊貫
一五一三一十八一七七
樽の口きるとこそやのいつも神酒　梅足
十八
一[七]七七七一十三一十三十三
存在しらすの和布刈見に立　牛如
五七一十五一一一一一
渡し守謡のやふな咄して　仝
一十五一一一一一二十三
あらやうかまし酔過に脱く笠　フ
一五一一一一一二三
いつことも限らしはなの真さかり　フ
一ム一ムム一一一一
駒鳥も雲雀もまけぬ朝起　フ」19ウ

甘棠子四十六点太路　三十五点雀媛子
甲長子五十五、太路　四十三点、牛如　三十二点素兆
兌堂七十二、菊貫子　四十一、升来子　四十二、公
陸馬三十九、梅足　三十八、太路　四十、梅足
為大六十六、公　四十六、升来子　三十三、升来子」20オ
　四十五、楳足
升来公持
蜧水子五十四、雀媛子四十八、升来子
涼山子七十四、霍媛子五十七、公　二十六、公
素朴四十一、太路　四十、升来子　五十四、梅足」20ウ
得器五十六、升来子四十八、公　三十二、雀媛子
古梁五十八、升来子三十五、霍媛子　四十、雲牙
　三十四、公」21オ
（白紙）」21ウ

亀文持　蜧水子　涼山子　得器　得友　立志
菊貫持　素磨子　霞外子　左簾　古梁　器観

百韻

珠成持　鶯嬌子　巵言子　紫鳳　冬映　退住

三月十六日」22オ
享和元年三月十六日
誹諧之連歌」22ウ
（＊23オより31ウまでの第三の百韻は、44オから53ウまでの第五の百韻と同一である。ただし、第五には点者として蜧水子が筆頭に加わっているので、第五のみを掲載する）
四月九日ゟ
五月七日
満尾」頭書
錦車子　子鷹　富屋
　莪堂　青山持
仙峨子　楞雲　秀仙
甲長子　雙覓　百珉

俳諧百韻　各六句言
月花折端
取句二点増

控

亀文子　沾山　為大
珠成子　兌堂　陸馬　催主難歩坂持
佛外
甘棠子　石鯨　吾山」32オ
（白紙）」32ウ
地謡の行義調ふ扇かな
　烏帽子の影の畏き全廃
撰集の三とせは反古の山なして
　遠い所も便の折〱
ふたつ啼よつなく守むら烏
　朝にかゝりて松の杖突
はつ鮭の鱗きらめく宵の月
　はや帷子の風の身にしむ」33オ
□□子　**蘭州子**　甲長子　**亀文子**　珠成子

甘棠子　子鷹　**樗雲**　双魚　**富屋**　莪堂
秀仙　百珉　**治山**　兌堂　**石鯨**　為大　**陸馬**　佛外　**吾山**」付箋

□　五一一一七七五七七七五五五五
五七七五一
相撲場のまはしに秋の色見えて　菊貫
□　五七一二一一七一七一七七一一
七一七七七
片倉領にめつらしい年　馬隠
□　七一一一一一一一五五一十七五
五七五一一
三夫婦の諸白髪なる山深み　花足
□　一五一一一一一一一一一一一一
一三一一五
娘の機の音の涼しき　大路
□　五一一一一一一五一三一一七
三一七五七
干なから着て来る蓑に綱提て　梅足
□　二一一一一一一一八一一七一一
一七一五一
極樂上戸罪咎はなし　環川
□　一一一一一一五五一一三一五一五
十一一二一
馬駕て疱瘡よけの札もらひ　雲牙」33ウ
□　五十一二一十二一一一二一五
五一一一一一
阿須波の神へ初旅の幣　有斐
□　五五一五五一十五五五五十七十
十五七一五五
雪兆もなふ師走閏に梅咲て　子絃
□　二七一一一一一十五一十一一一一
一五一一一
大徳の書を紅国の額　遮莫
□　十五一一一三七七七七五五五
五一十一三
銀燭に狩衣の透く白拍子　柿絮
□　一一一七一一一一一一一一一
一一一一一
帰雁鳴行霄の月影　フ
□　一一一一一一一一一一一一一
一一一一一
一面に花の盛の時なれや　フ
□　一一一一一一一一一一一一一
一一一一一
陽炎の立若艸の色　フ」34オ
二
□　七一七一七七三五五十八三五一一
一一一一七
見分ゝの騎射も其日の真手つかひ　如圭
□　一五一一一一一一一一一一一
一一一一七
乳人の側を辿し澤菴　芦風
□　二一一一五一一一一一一一一
一一一一一
遁世の夜はからふしき旅まくら　馬隠
□　七十五一一一十一七七五一七
十一十一十五五
魚の油て奢る七里　花足
□　十五五一一一三一七三一一一一
一五一一一
丸山の禿美顔もよく覚え　太路
□　七五一一一一一十八五五三十一七
五五一一一
下戸て難面き拳の先生　梅足
□　十五一一一廿五三一五五一五五
十七一七七
おしけなく切てくれるも牡丹好　環川」34ウ
□　七十十五一一一七七七一一一
二十五七一五一
百両懸た井戸に錠前　菊貫
□　二一一一一一一一一一五一三一
一一一一五
相場師も絶へぬ淀屋の白鼠　芦風
□　二一一一十五五五五一三七五五
一一一五七
煤掃た夜にとつさりと雪　雲牙
二十七
□　五七三一七七十八廿十一七十三
五十五七五十
看病の上手ひそかに笑はせて　梅足
□　十十八一一一七三一一七七一一
一七五一三
三十二相似珠が疵　太路
□　一一一一一一一一一一一一一
一一一一一
笙の音もなまめく斗昼の月　フ
□　一一一十一一一一一一一一一
七一一二一
山の手遠くおもひ入秋　フ」35オ
二ウ
□　七三一七一七廿二十五七七五五十五
甘二十七十七五十十五
物申に菊の陰から返辭して　菊貫
□　一一一一三一一一七三三十八三一

七七一五一
禁酒かために僧の取持　馬隠
□一一七五一一一五五七一一一一
一一一一一
手枕に見透されたる入ほくろ　花足
□一三七一一一一十一一七一一十五
七七一七五
明るき文に包む温石　環川
□七一三一一十七五七十五三十五
五五三五五
孝行の小舅まえて行渡　雲牙
□七一一一一一五五一一五五一一
一一五五十
雨に色ある庭の紫陽花　芦風
□一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一
月を見ぬ宵は手燭の影涼し　フ」35ウ
□五一一二一五一一九一二七五三
一五十一一
錦の如くの御意に泣く尼　如圭
□五一一一一十一五一一一一一一
一一一一五
連歌にも良雄か筆の行届き　子絃
□十十十一五一五七五十五三五一五
一一一一三
魂すへて雪の居續　遮莫
□二一一一一一一一一一一一二一七
一一一一一
もろく寐る大生酔に振きせて　有斐
□二一一一一一一一一十一二一一五
一一三一一
辛子に涙持し小坐頭　柳絮
□一一一一一五一一一一一一七一一
一一一一一
板屋根も花の頃とて繕はす　フ
□五一一二一一一一一一一一一
一一一一一
雨吹晴らす東風のおもむき　フ」36オ
三
□一十五一六五一七一十二七十五一
七一十五七一七
白〳〵と春の鵜川の朝箒　如圭
□十五五一一一七一七五五一三五五
五五七三
賃機迄も嫁の手一ッ　有斐
□七一七一一五五三七一七一一五
一一五一一
連立も同う朝の初瀬詣　柳絮
□二七一七一七十一五七五一十五
十三十七五五
馬骨を隠す夏草の丈ケ　子弦
□五一一一一一一一一七一十三一一
十一一一七
松原を間遠に燈す朱の母衣　遮莫
□五七一六一一三一一十十五一一
一一五二一
三日つゝいて不二を見る濱　芦風
□五七三三一七一五一三七十五七五
五十一二五
槌音の波にくたける碇鍛冶　馬隠」36ウ
□一一一三一一一一一一三一三五
一一一十一
笑ふて斗それか福相　梅足
□十五十五五十五一十五十七七五五
五七十八五十五七五
借切に桜一日なめゝかす　菊貫
□五五五二一一三一十一一二五一五
一五一十八十
厠に封を付る蜂の巣　花足
□十一一一七一七五九一十三一七
十七一十五五
藪入の起ぬ内から隣の子　環川
□一一三一一一一二七十一一一五
一三一三一
文頼まれて重い懐　雲牙
□一一一一一一一一一一一一一一
一一一一
雲折〳〵月面白き山のかい　フ
㊂㊄㊂㊂㊂㊂㊂㊂㊂㊂㊂㊂㊂㊂
㊂㊂㊂
㊂　其侭随て名所見る毛見　梅足」37オ
三ウ
□一一一一三十三一八一一五五一
五五一五三
紅葉から新酒賣出す出来分限　太路
□二一七一一七三七一十一一一五
一三一三一
娵入支度に口ゐる母　菊貫
□七一一一一一一一一一一三一一七
一三一一一
洗髪きのふの髢と思はれす　花足
□一一三一一一一十五一五十二十一十
五一一三十七
歳暮使もいわふ胴あけ　馬隠

□七一一四七七七三一五一五一五
三一一五三
ふる雪になを透通る梅も花　雲牙
□二一一一五一一一一一一一五五
十五一一一
我手柄ふる勝公事の宿　太路
□一一五五一一一五七二二七一
一七一五七
庖丁もきつて納所のしたり顔　芦風」37ウ
□十一一一一五七五一五五三七
一七一一
蓮見のわたり碁盤持出す　環川
□一一一一一一一一一一一一一
一一一一
川添にいきれの残る朝の月　フ
□一一一一一一八三一一一一
一五一一十
たをや女をける派手な人質　如圭
□十三一一一七一一一七一一一七
一七二二
乗掛を留めて野上の里のつて　有斐
□二一一一一一七一三一一七
一五一七一
歩判て持ては苦にならぬ金　遮莫
□一一一一一一一一一一一一一
一一一一
此頃は續て空も花曇り
⑫⑫⑪㊂㊄㊂⑫㊂⑫㊂⑫㊈㊈㊃㊂
㊂㊈㊂㊂㊆㊆㊂
團十郎を爪て見る郷　子紘」38オ
ナ
□七十五一一一一一一五一一五一一

一一五一一
綿かつく内侍も曠か踏歌の夜　有斐
□五一一一一一一一一一七一五
一三七一一
眼光に色を含むほろ酔　柳絮
□一五一一七七五五一一一一一一
一五一七一
青竹に御威光の鶴結ひ付ヶて　如圭
□五七一五五一三一七五十七十十
五十七十三七
舩は掟の膝切の川　子紘
□五一一一五五一五七一五七五
一一一五
宮寂て石の華表に苔衣　柳絮
□五七一一一一一一一一三五一
七五一一一
まなはん灶(真香反)て奉納の琵琶　「有斐
□二一一一五一五一一一三一一一
一五一一一
子の様に鹿立の狆秘蔵して　遮莫」38ウ
□五一一一七一一一一五一一五五
一三一二十八
逢ふ人ことに長い本復　「如圭六
□一一五一一十五一七七一十一七七
五七一十三
強弓の弦も手練のかけはづし　「子紘
□一一七三一七三一五一七十五三一
一三一一五
立派に雪を掻し新宅　「遮莫
□一一十一一一七二七七十五五一七
七七五一十

身請してからは咄も少なくて　「柳絮
□十一五一五一一一九五二一一一
一一一二
不審ものなり下女めかぬ下女　「花足
□一一十一一一一一一一一一一
一一一一
けしからす犬の鳴たつ月の夜に　フ
□一一一一一一一七一一一一
一一一五一
はや秋風のさそふ川浪　フ」39オ
ナウ
□七五一二一七十十五五七五五七七
一七七一一
一すちに後世に棹さす施餓鬼舩　「馬隠
□一三一三一一五二一一五五十五
七十八｜十一三
酸いも甘いも喰て發心　「菊貫六
□十一一二一一十五七五七五一五
五十五一一七
蜀魂聞て其角は噂酒　「太路
四[廿]三十五一一一三五一一二三一一
五三一五十五
幟の鯉は五月雨の瀧　「環川六
□五一一五一一一五一七一一一
一一十一一
庭風呂に憂しや木曽路の傘さして　「梅足
□五一一一五七一一一一一五一三
一一一七一
堀出しものと熊の皮買　「芦風
□㊂㊂㊂㊅㊆㊂㊂㊂㊆㊄㊄㊆㊂㊂
㊄㊂㊂㊂㊃
加増地の堺上りも花の春　「雲牙

□
□ ム一一一一一一ムム一ム一一一
ム一　」39ウ
枝を鳴さぬ丘風長閑き　フ
錦車子　子絃（三十四点）、如圭（三十二）、子鷹（卅一）、雲牙　有斐（廿九）、梅足（三十六）　子絃（卅八）
甲長子　有斐（四十一）、子絃（三十三）、樗雲　菊貫（四十九）、子絃（四十一）、大路（三十一）　馬隠（三十五）」40オ
蘭州丈　環川（五十三）、有斐（四十四）、雙鳧　梅足（卅四）、環川（卅三）、花足（四十）　菊貫（廿九）
亀文子　菊貫（卅五）、梅足（廿七）、莪堂　梅足（卅五）、子弦（卅八）、環川（廿六）　雲牙」（卅四）40ウ
珠成子　菊貫（位二十二）、子弦（廿二）、秀仙　子弦（四十）、如圭（三十八）、花足（廿一）　柳絮（二十七）
甘棠子　子弦（卅七、位廿七）、遮莫　百珉　馬隠（五十六）、遮莫（卅六）、雲牙（廿七）　雲牙」（廿八）41オ
富屋　菊貫（位卅八、卅八）、花足　兇堂　菊貫（四十五）、子弦（四十四）、子弦（卅七）　梅足（卅八）
沾山　菊貫（四十一、卅八）、子弦　石鯨　菊貫（六十七）、子弦（四十八）、如圭（廿四）　環川」（卅四）41ウ
為大　菊貫（六十二）、環川（卅九）　陸馬　菊貫（五十八、卅五）、如圭　子弦（卅八）　柳絮（卅一）
佛外　子絃（四十一、四十）、梅足　吾山　環川（四十九）、如圭（四十三）　環川（四十）　子弦」（卅七）42オ
二十評之内
九評　菊貫勝
五評　子弦勝
二評　環川勝
一評　有斐勝
一評　梅足勝
一評　雲牙勝」42ウ
一評　馬隠勝」43オ
享和元辛酉年

拾五評百韻點附

四月

會筵白日菴」44オ
花は春に譲りて永き日のゆたか　一七五五一一一一一一一一三
くむや霞に舞祝す鶴　薬くさいとなふる移り香　珠成
縣召都言葉にたみありて　一三一七一一五七七七一七一七七
美々しき中の笑こらゆる　笹蟹のふるまひに似た土用干　菊貫
ほんのりと海を東の山かつら　七十一十一七二七五五一五一五二
新綿舟の氣さきいさまし　寝た子にしのひ〳〵剃刀　環川
百姓は案堵のうへの後の月　一一一一一一三三一一一七五五
處吹く風のひゐやりと来る」45オ　出入する春屋は跡を掃除して　立葵
蜄水子　**凉山子**　素磨子　**霞外子**　鶯嬌子　七十三五一八一十五一一五一十八一一十
巵言子　得器　**得友**　立志　**左簾**　古梁　時行唄まて乗て来る舩　梅足
器観　紫鳳　**冬映**　退住」付箋　一七一十一一五一十一十八一七一二
ウ　須摩は須磨明石ほの〳〵陽氣立　素外」45ウ
五十五一五七一七三二一一三一一五　十七一十一一五一十一十八一七一二
紅毛の眼の猶赤き別れ酒　亀文　調合すむを待て出す膳　松岡
一五十五十五一一五一一七一七一
髪を嗅やうに呵く罔両　亀文
五五五五五一二二一一二一五三
素人めかせて藝者憎らし　一歩
一一三一二十三一十一一一一五一
砂糖湯のこほれて琴の下を行　松岡
一一三一一一一一三七一一一一
下賀茂辺り物毎か雑ッ　規外
一一一一一一一一一一一一一一
そろ〳〵と晴れかゝりたる胸の月
一七七一一一二十八七五一五一十五三
実意は深し病中の和哥　素外」46オ
二
五五一一五一一一一一七五一十五
恨いふ時も靨のいとゝ猶　梅足
七三一三一一十　七十五　七五五十一一
雨の廓も耳なしの山　立葵
五三三五十五　一七五十　一七十一一二

縮緬に似て似す弱き芥子の花　珠成
一十一一一一一一一一一一一一
禁酒以来初夜しるゝ夏　環川
一一一七三一七七五十五一一一一三
摺小木の足を抱へて鞠子まて　菊貫
一一一一十七一三一十五一一一一三
破荷の傍に馬はまち〳〵　素外
五十五七七五五二二五一七一一五
温石も忘れて出し山さくら　立葵」46ウ
一一一一一一一一一一一一一一
残りて曇る月のあたゝか
七七一七二十五三一二一一二五五二
京の春よそ目に帔うつくしき　亀文
十五一十五七二十十十五五十三五十三一三一
伽藍に響く一文の音　珠成
一一一一一二五七一一一一一一
吹入るちよつとひねつて飴袋　環川
一三一一一一一七二七一三一一十
覗けはしかる武蔵玉川　規外
一一一一一七一一一一一七五四
目を除る為に榎や添の木　一歩
一一一一一一一一三三十三一一一
ふと格子からよい風の来る
二ウ
十五五三五一五七二一一一一一
安睡をされては俗な膝枕　亀文
一七十十八一一七一七三七五五三二
遣手の鬼をやらふ豆銀　珠成
一三一一三三一一一一一五一五
破笠を着て水仙も冬籠　一歩
十三一一五一一一五五七一一一五十
別荘の茶のこち付た寂　梅足
七七一一一五一十三一七七一一
氣の付ぬ事の入歯も糸細工　環川
十十五一一七七一三二五一五十五七三
大孝行の貧も名に立　菊貫
一一一一一一一一五一一一一
推量て公事取捌く國なまり　松岡」47ウ
一一一一一一一一一一一一一
裏屋におもひかけもなき恋　一歩
一一一一一一一一一一一一一
夫としる相図おかしき月明り
五十一一一七一一一一十七一八
寐た生酔に炑も蚊柱　松岡
一七十三五一一十五十三十五五一五一一二
蔵と子のなくはと見ゆる菊の宿　珠成
一一一一一一一一一一一一一
植木好なり花も紅葉も
五一一五ム一七一一一十五一一三
釋尊髭かあらはと思はれて
一一一一一一一一一一一一一
東風にいよ〳〵心いそ〳〵」48オ
一三一七七七三七五十一二五十八
三
陽炎の足からもたつ汐干狩　菊貫
十二十二十十三五一二五七三一十五一七一
醫者の娘ておかし薮入　亀文
一一一一三二一一一二五一一
帰依僧の妬みの事を教化する　立葵
五七七十十五十八三十八一五一十一十七
牡丹手向て戸のたゝぬ笈　一歩
一五一三一一一一二一一三一一一
うにの香に頭痛かゝへる雨の伊賀　梅足
七三一五一一七五七七一七七一六
もの喰ふ事も荒い助太刀　松岡
一一一一三一五一三五五一十一二
宿引の奇麗自慢を言馴て　立葵」48ウ
一一一一一一一一一一一一一一
心の絵圖をあてし造り木　規外
一一一一一一七一十五一一五五一
泉水に浮める船の姦しき　菊貫
一五一一一一一一一一一一一一
褌にかけし妘の袖　立葵
一一一二十七三七二一七一二十二十十一
長刀の稽古に櫛を真二ッ　素外
七一一一一一五七一一一一一一
終に安産をかゝぬ囲達　松岡
一一一一一一一一一一一一一一
寒月の隈なくはれてきら〳〵と
一七一一一一五一三十五七五五一
角力仲間の寄合に鰒　素外」49オ
三ウ
五三一一三㊀二一五一一二五一一
冨士見へる宿ハ借家の儲もの　一歩
七十一一一一一二一一一一五
一藝もつて沙汰のある醫師　梅足
一三一七一一五一一五五一五二
年ゆかぬう婆を寄てなふりづけ　立葵
三五五一一一一五一一一一三
蹌跛て逃る立聞の影　珠成
一三一一一五一七十三一一五一十四
づか〳〵と出すともの場へ背高蜘　環川
十七五一三二十五五五五一五五一一
鰹〳〵と釈迦の産声　菊貫
七一一五一一一十一一七一一一七
十能かあれは火箸か又みえす　松岡」49ウ

三一五一十一三五七十七一一七二
暦の下段雨の降体　規外
一一一三一一七三一五五二七五十五
棟揚の差圖も吉田三位から　立葵
一一一一一一一一一一五一一一
ふたつ取には餅よりハ是
一十一一一一十一一一一一十一
呵つたりたましたりして針仕支　環川
一八十八七一十三十七七五一二十五十三六
美人て判じものゝ客分ゝ　亀文
一一一一一一一一一一一一一
夕日の花になまめく其にほひ
一一一一一一一一一一一一一
枸杞の芽こほす椽側の塵」50オ
ナヲ
一一五五一十五一一一一五七十五三
うなる土佐まつ治聾酒の利見えて珠成
一七一七一七一五一五一二五五五
孫の手染る米の一筆　菊貫
七七一三五十十三三五七一十五一三一
人も又鯨捕る家の鰯ほと　梅足
一一十一一一一一一一一一七二
しきりに眠氣大囲爐裏はた　環川
三十一一一一一一一五一三一五一
訳もなく噺上手の笑はせて　一歩
一三五一七一二七一一二十一十一十
閏月には名の付ぬ雨　松岡

一七一七十五一一一一七一一一
紫衣勅許臺子の傳も其序　梅足」50ウ
十十一五一七五一一三一三七一九
座頭の嗅て這入木屋町　一歩
一七一一一二一一五一一一五一
寐食も忘果たる碁の敵　環川
一十一七一一三一一一一五七五
前帯にして女房ふる娵　梅足
一七一五一一十八二十十八十五五一一二
猪牙つゝく夕なからも烠の川　珠成
一一一一一一一一七五七五一一三
しろ銀ぞくり網の洲走り　素外
一一一一一一一一一一一一一
一さしも二指も舞ふ月の興
一一三一一一一一一一一一一
絶すちら〳〵燭臺に風」51オ
ナウ
十十十八十一一二十五十一十五三一十八三
膝へ腰かけて居る子も大一座　亀文
二十七五一五一七五一一一一五七
牽頭か寐言三弦に乗　菊貫
一三一一一一一一五一一一一一
恋に名を知られしからに老ぬれと
一十一一一三一七二七一七十五五二
世の程にくき江戸の真中　亀文
一一一一五一五三三一一一一七一
判取を呼聲何に似たるへし

一一一一一一一一一一一一一一一
けふは誠に近来の空
一一一三一一二三二三二一一一
楼は花に霞まぬ四方の景
一一一一一一一一一一一一ム
壽を奉る山々の春」51ウ

右甲乙

蜃水子評　六十二点　亀文　四十五点　菊貫　四十二点　梅足
凉山子評　九十点　亀文　五十八点　梅足　四十九点　環川
素麻呂評　六十八点　亀文　四十三点　珠成　十八点　一歩」52オ
霞外子評　五十九点　珠成　五十五点　亀文　三十二点　菊貫
鶯嬌子評　三十六点　亀文　三十三点　松岡　三十二点　珠成
巵言子評　四十八点　一歩　三十点　菊貫　二十六点　亀文
得器評　六十四点　珠成　四十五点　菊貫　三十六点　位梅」52ウ
得友評　六十一点　珠成　五十点　亀文　四十点　菊貫
立志評　七十三点　珠成　四十二点　環川　三十三点　亀文
左簾評　六十三点　菊貫　三十九点　珠成　二十六点　立葵
古梁評　五十点　松岡　二十八点　珠成　二十四点　立葵」53オ
器觀評　五十八点　亀文　五十三点　梅足　四十五点　珠成
紫鳳評　四十二点　立葵　三十五点　松岡　三十四点　菊貫
冬映評　五十七点　亀文　四十三点　素外　三十六点　菊貫
退住評　四十九点　菊貫　四十八点　梅足　三十六点　松岡」53ウ

＊本稿は、日本科学振興会の学術研究補助金による〈基盤研究C〉「真田文書アーカイブの構築及び松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧に関する研究」（課題研究番号 22520252 研究代表者玉城司）に基づく。